

涙・駅伝初優勝

三年 渡部 真一（昭和六三年度）

十月二十二日。土曜日。僕たち三年生にとって最後の駅伝大会が行われた。

前の晩、僕はある決意を固めた。それは、僕は一区と四区の計四キロを走らなければならない。運動もあまりしていないし、不安だったので自分の足を見た。部活をやっていた頃より筋力が落ちているのはあきらかだ。しかし、過去八年間の駅伝大会ではギリに近い成績だったので、何としても優勝すること、区間新記録をつくることを、心の中で何度も自分に言い聞かせた。

そして、大会の日、みんなも気合いが入っているようだった。開会式のため、みんなグラウンドへ向った。何だか頭が痛い。だるい。僕だけは保健室へ向かった。体温を測ったら、な、なんと三十七度五分。ふと僕は、少年マンガを思い出した。

「ここで無理を承知で走って、それでも優勝して、走り終わってから倒れて、そこに女の子たちが集まってきた、泣きながら心配する。」いや、そんなことを考えている場合じゃない。もし、自分が走れなかったら、チームのみんなに迷惑をかけることになる。それに、昨晚の決意を思い出した。先生たちは、心配して僕を止めようとした。でも僕は、「走る。走れる。」と、言い、「走り抜いてやる。」と、心

の中で思った。開会式も終わり、走る位置へと向った。なぜか落ちて着いていた。熱のせいかと思った。スタートが近づくにつれいつもは心臓が破れんばかりに鼓動が激しくなるのだが、今回はやけに冷静だった。他の人たちがウォーミングアップをする中で、自分だけが横になっていた。刻一刻と時間は進み、いよいよスタートだ。

「思いっきり青春しましょかね。」と、思いつつ走り出した。僕がいきなり飛び出してやった。思ったより足が上がる。いけそうだと、ところが、坂を走り終わったところで吐き気がした。無理かなとも思ったが、区間新を狙っていたので「だめだ。だめだ。」と、自分に言い聞かせた。三区スタート地点で声援が飛んだ。必死に応援してくれている同じチームの友紀子さんの姿に勇気づけられた。まだトップを走っている。しかし、だんだん息が荒くなってきたのが分かる。これは、下り坂で体力を回復するしかない。下り坂にさしかかった。ところがその時、勝君が僕を抜いていった。こうなれば僕にも意地というものがある。マンガ風にすれば、「カール・ルイスだろうが、ベン・ジョンソンだろうが俺の前は走らせねえ。」と、思い、早くもスパートをかけた。勝君を抜き返し、折り返し地点まできた。

二区は洋子さんである。一位か二位で行ってくれればと思いがちだったが、タイムを聞くと、六分五十四秒。堂々一位の区間新だった。僕はうれしさいっぱいで、小さくガッツポーズをした。あとは四区を走り、トップでゴールインするだけだ。車に乗り四区に向かった。途中、走り終えた第二走者のみんなと会った。洋子さ

んに「どうだった。」と聞くと、「ごめん。二位だけ。」と言った。よし。思った通りいつてくれた。「だいじょうぶ？」洋子さんが声をかけてくれた。また後輩に勇気づけられ、照れくさくなった。僕たちは四区スタート地点まで急いだ。途中、第三走者のみんなが走っていた。一人一人に声援を送っていた。するとトップを走っているのはチームの友紀子さんだった。内心、「ラッキー」と思いつつ、めいっぱい声をかけた。

四区スタート地点。心の中で、一番で来るようにと 何度も繰り返した。すると一番で友紀子さんが来た。自分自身に気合を入れた。トップでたすきを受けた僕は、頭の中で、「一位。女の子。」という、とんでもないことを考えながらゴールをめざした。苦しかったが、島の人たちが応援してくれた。中村の人たちが声をかけてくれた時は、思わず涙が頬を流れた。涙が止まらなかった。こんな思いをしたのは初めてだと思った。こんなに苦しい思いで走ったのは今までなかった。学校が見えた。一番。チームのみんなの喜ぶ顔が頭の中を渦巻いていた。「初の一位」のゴールを直前に、僕はただうれしさでいっぱいだった。自分の願いが現実となった。チームの二人が涙を流した。

「何泣いてんだろ。」と口に出そうとしたが、自分も泣いているのに気づき心の中で押さえた。熱との戦いで勝った。自分に勝った。走った区間全てが新記録だった。優勝した。一つがとてもうれしかった。

僕自身、この涙の駅伝大会は、学校生活最高の思い出だと思う。

今もまだ、はつきりと心に焼き付いている。洋子さん、友紀子さん他のみんな、最高の思い出をありがとう。閉会式も終わり、最後の駅伝大会が去っていった。